シュライエルマッハーにおける「神学と哲学」(一)

——松村神学の位置づけを考慮しつつ——

高森　昭

内容目次

序　論
一、研究史をめぐる問題点
二、シュライエルマッハーの神学的著作における「神学と哲学」
(イ) 宗教論
(ロ) 神学通論
(ハ) 信仰論
(ニ) 其他（とくに新約関係の著作）
三、シュライエルマッハーの説教における「神学と哲学」
（以下継続）
四、シュライエルマッハーの哲学的著作における「神学と哲学」
(イ) 独語録
(ロ) 降誕祭
(ハ) 倫理学および関連諸著作
(ニ) 解釈学
(ホ) 弁証法
(ヘ) 其他（とくに書評）
五、プラトン翻訳に示されたる「神学と哲学」
六、シュライエルマッハーの書簡における「神学と哲学」
七、其他の諸作品に表われたる「神学と哲学」
結　論
注
参考文献

序　論

フリードリッヒ・シュライエルマッハー Fr. Schleiermacher（一七六八—一八三四年）に関する研究が、第二次大戦後に再び軌道にのり新たなる刺戟のもとに展開されてくるなかで、その神学と哲学との関連は如何なるものであったろうかという問題が大きな関心を集めることとなった。この主題がキリスト教神学の長い歴史において、「神学と哲学」Theologie und Philosophie として論じられ探究され続けてきたばかりでなく、同時にそれは西洋精神史をつ

らぬいて視野に置かれてきたものである事は今さら言うまでもない。したがってシュライエルマッハーの広範囲にわたる著作活動において、どの様にこの問題が取り上げられ展開されているかに多くの研究者が注目しつつあるのは当然であろう。この意味においてエーベリンクが「神学と哲学」との関連づけの構造こそは、「シュライエルマッハー解釈の中心問題」[1]を提示するとしたのは正に的中した指摘であったと言えよう。

しかしながら我々はここでシュライエルマッハーにおける「神学と哲学」という主題が、研究者にとって刺戟にとむものであると同時に、極めて困難な仕事として受け取られていることを指摘せねばならない。いま茲で研究史をかえり見るよりも、二十世紀神学におけるシュライエルマッハー批判者として最も有力な存在のひとりであったカール・バルトの場合を例としてあげて見たいと思う。すなわち、彼は死去の直前にしるしたシュライエルマッハー著作選集への「あとがき」において、我々の主題にふれて次の如く述べている。

「シュライエルマッハーはその人格的統一において、首尾一貫した哲学と、同じように首尾一貫した神学を発見し、それを主張したのである。そしてこのふたつの領域において、全体と個、初期のものと後期のものとの、注目すべき緊密な連関を保ちつつ研究を進めたのである。[2]」

しかし、バルト自身はこの同じ「あとがき」の中で、この様な一見まことに壮大な神学と哲学との連関こそが、長きにわたる困惑の原因でもあったことを語っている。バルトはこの点で果してシュライエルマッハーを正しく理解したのであろうかと自問しつつ、彼自身のシュライエルマッハー解釈を表明したのである。その場合にバルトは合せて五組の問いを提出する形でそれを示そうとしているが、その中で我々の主題に関連して次の如くに述べている。すなわち、

「……シュライエルマッハーの企てにおいては、必然的に、その内奥において、本来的に、礼拝・説教・堅信礼教育・教会をめざすキリスト教神学が問題にされているのではないか。その神学が、ただ偶然的に、外面的に、非本来的に、その時代の人間に適合する哲学の装いをしているのではないか。そうとすれば、――個々のことはすべて別にして――この企てを肯定するということでは、いずれにせよ、わたし自身納得しなければならなかったことは明らかである。……あるいはシュライエルマッハーにおいては、原初的に、その内奥において、本来的に、アリストテレス・カント・フィヒテなどからは離反し、その代わりに、プラトン・スピノザ・シェリングなどに近くうちたてられた、ロゴスとエートスとを媒介し、審美的にこの両者を高める、キリスト教とは無関係な哲学が問題にされているのであり、その哲学が、ただ偶然的に、外面的に、非本来的に、ひとつの神学、キリスト教神学という装いのもとに自分を隠していたのではなかろうか。もしそうであれば、わたしがシュライエルマッハーに対して、ただ距離を取り、これを保つよりほかはあり得なかったであろうことは明らかである。[3]」

今ここでバルトのこうした立場の表明そのものを検討することは、当面のわれわれの課題ではない。むしろ、このような例を通して、シュライエルマッハーにおける「神学と哲学」の関連を探究する課題は、こんにち極めて刺戟にあふれた仕事であり、また同時に決してかんたんに片附けることの出来ない、深い大きな主題である点に注目すれば足りるのではあるまいか。

バルトの場合に見られるようなシュライエルマッハーの神学と哲学との関連づけに対する或る種の困惑は、筆者の見る限りではシュライエルマッハー自身の思想そのものにも原因の一端があるように思われる。すなわち、彼はヘー

ゲルと比較すれば誠に一目瞭然であるが、いわゆる体系家と言えるようなタイプの人ではなかった。むしろ我々がこんにち理解しているような意味における実存的な思索の人であったと見なしても、あながち的が外れているとは言えないのである。事実、かつてD・F・シュトラウスがヘーゲルとの対比によって示した次のような二行連詩は、あますところなくシュライエルマッハーの特色を性格づけている。

「彼（シュライエルマッハー）は、その体系よりも賢明なのである。
　したがって、彼の霊が欠けている弟子どもの格好は見られたものではない。[4]」

すなわち、シュライエルマッハーは自己の形成する体系よりも常に先へ進んでいるような型の思想家であったことが、ここにはシュトラウス一流の軽妙な皮肉とユーモアとをもって示されている。正にこの点に筆者はシュライエルマッハーにおける神学と哲学の関連を解明するに際して、つねに研究者が当惑させられてきたことの原因の一つがあると考えるものである。

しかしながら、シュライエルマッハーにおける神学と哲学の関連を明らかにする課題は、この様な困難にも拘らず、依然として我々の前に横たえられている。我々もまた自らの手で全力を傾けて、この主題に取りくむことの必要をふかく覚えるものである。

ここで今一度われわれはシュライエルマッハーが神学者・説教者であることを自己の使命として確信していたが、その学問的な活動範囲は哲学・西洋古典学・解釈学を始めとする多くの領域にも及んでいた事実に思いをいたさねばならない。したがって我々の探究もまた、これに即して広範囲のものにならざるを得ないであろう。先ず研究史をかえりみて見出される問題点を考察したのちに、シュライエルマッハーの神学的諸著作において、如何に「神学と哲学」の問題が取り扱われているかを検討したい。つづいて彼の説教のなかで、我々の主題が取りあげられている姿を解明してみたいと考えるものである。さらにシュライエルマッハーの哲学的諸著作における神学と哲学との関連づけが、どのように示されているかを明らかにして見たいと思う。続いて彼のプラトン飜訳において、またその書簡において、「神学と哲学」は如何に取りあげられ説明されているかを考察することは、必ずや我々の主題にゆたかな実りをもたらすであろう。そのほか、シュライエルマッハーの数多い講演や論文、また講義などのなかで、「神学と哲学」の問題を彼がどのように取り扱っているかについても考察を重ねて見たいと願うものである。

最後に筆者は本論文を書きしるす意図として、松村克己教授の神学思想を位置づける一つの試みを念頭においている点を指摘しておきたいと思う。すなわち松村神学の形成過程を通して、次第に明らかにされ提唱されてきた「アナロギア・イマギニス」[5]の論理は、たしかに我々の主題である「神学と哲学」の問題に密着しているものである。しかも根源的論理としての「神学の論理」として提唱されたアナロギア・イマギニスは、中世において確立されてアナロギア・エンティスを批判的に止揚するプロテスタント神学の論理であり得ることを目指している。このような松村神学における基本的な構想を視野におくときに、我々はシュライエルマッハーにおける神学と哲学に関する探究が、必ずや松村神学の位置づけに貢献を果し得ることを確信するものである。同時にそれはまた、一見まことに膨大な材料を前にして困難な課題をさけられぬシュライエルマッハー研究にとって、何等かの意味で良き刺戟となることを期待し得るのである。筆者があえて記念論文集に表記の主題を選んだ理由が茲にあることを強調したいと思う。

一　研究史をめぐる問題点

さてシュライエルマッハーにおける「神学と哲学」の問題が、その一五〇年近くに及ぶ研究史においてはどの様に取り上げられてきたであろうか。我々はこれを本章において概観するとともに、そこに見出される問題点を明らかにすることに努めたいと思う。

研究史をかえり見るときに、我々の主題に関してこれまで多くの研究者が、種々の解答を提出してきたことに気づかせられる。にも拘らず、そこにはなお明らかにされ得ていない事柄が少なからず見出されることも事実である。以下に我々の検討した結果をかんたんに記してみたい。

一八三四年にシュライエルマッハーが死去した時に、のこされた彼の蔵書は三千五百冊をこえていた。それらを中心に作製された詳細な目録をこんにち我々は手中にすることができる。(6) それによると神学に関係する各種の書籍、資料ならびに著作は一七六二点におよび、また古典文献学は六二七点、さらに哲学関係として六九〇点あわせて一三一七点に達している。この外に地理、歴史、自然史その他の各種資料五七六点を総計して、全体で三六五五点の多きに及んでいる。この事実をもってしても我々の主題である「神学と哲学」は、シュライエルマッハー自身がその生涯をついやして取りくんできた課題であったことが推察できるであろう。さらに現在、ベルリン科学アカデミー Akademie der Wissenschaften zu Berlin に保存されているシュライエルマッハーの遺稿、書簡、書類、講義原稿などにも、おびただしい数の神学ならびに哲学に関する材料がのこされており、その著作全集が刊行される際には全貌を明らかにすることが期待されている。(7) このようにシュライエルマッハーにおける「神学と哲学」という主題に徹底的にとりくむためには、我々は今日なお完璧な資料を持つには至っていない実状を先ず認識せねばならない。それは将来かならずや達成されるであろうことを確信しつつ、こんにち我々の手中にし得る全ての材料を駆使して最善をつくすべきであろう。

さて、今われわれが研究史をくまなく探索するときに、そこには我々の主題に関して数多くの業績がのこされているのを見出す。それら全てを茲で取りあげるのは必ずしも意味のあることでもないので、我々はそれらの中から特に重要と思われるものを選び出して検討を試みたいと思う。(8)

我々は先ず、D・F・シュトラウスがシュライエルマッハーの神学と哲学の関連づけに対して行った批判を想いおこす必要がある。彼は一八三九年に発表した一論文 Schleiermacher und Daub in ihrer Bedeutung für die Theologie unserer Zeit のなかに、「シュライエルマッハーはプロテスタント神学のカントである」(9) と指摘している。そのシュライエルマッハーがカント主義者であったという意味ではない。むしろカント独特の批判主義を自己の哲学的思考に生かしながら、他方カントが採り入れてきた宗教改革のモチーフを近代において強調しようとしているとシュトラウスは見なすのである。(10) そこには明らかに神学と哲学とを調和的にとらえ、また信仰と学問とを二元的に折衷せんとするシュライエルマッハーの行き方への批判が見られる。同様の論旨は、さらにシュライエルマッハーの神学が、スピノーザ主義と類似しているとする激しい批判となって表われる。(11) こうしたシュトラウスの攻撃はついに彼が一八四〇年より四一年にかけて刊行したその著 Die christliche Glaubenslehre in ihrer geschichtlichen Entwicklung und im Kampfe mit modernen Wissenschaft dergestellt において頂点に達した感がある。すなわちそこでシュトラウスはシュライエルマッハーを、「新しき哲学の学校で教育をうけながら、古き神学の陣営に寝返りをうった」と言ってい

る。[12] さらに続いて次の如くシュトラウスは述べている。「……彼が神学に対する哲学の裏切りのみならず、同時に哲学に対する神学の裏切りをなしたことを見るならば、人は最早さほど立腹するにも及ぶまい。つまりこうした両面性と両義性こそが神学史におけるシュライエルマッハーの位置に外ならないのだし、その故に彼は神学と哲学の双方から祝福にみちた呪いと呪われた祝福とをもって遇せられるだけなのである。[13]」これらの批判を通してシュライエルマッハーを、神学と哲学との調和ないしは折衷をはかった許しがたき裏切り者とみなす立場が表われている。我々はこのシュトラウスの批判が十九世紀のシュライエルマッハー研究に、つよい影響を及ぼした事実を知らねばならない。

次に十九世紀後半においてシュライエルマッハー研究史に足跡をとどめるのは、リッチュル学派のひとりに数えられるヴィルヘルム・ベンダー W. Bender である。彼は一八七六年より七八年にかけて六百頁をこえる著作 Schleiermachers Theologie mit ihren philosophischen Grundlagen dargestellt[14] をあらわしている。シュライエルマッハーの思想を総括的にまとめたモノグラフィーとして、われわれはベンダー以後こんにちまで、これに匹敵するものを持っていないのである。この意味において彼の業績は記憶されるべきであろう。しかしながらベンダー自身は、シュライエルマッハーの多方面にわたる貢献をみとめつつも、一貫して「その神学が基礎にしている汎神論的形而上学には甚本的に反対する[15]」ことを主張してやまない。さらにシュライエルマッハーの神学を取りあげ叙述した、本書の第二部においては大半の頁数を、信仰論の内容を説明することにあてているのである。[16] 結局のところベンダーにとっては、シュライエルマッハーは神学に哲学の影響が好ましからぬ仕方で及ぶ道を開いた責任を負うべき者であり、かくして神学を哲学に従属させ、ひいては神学を哲学に解消させる危険をさけ得なかったものとして批判されるべき存在であった。このような見解はもちろん程度の差こそあれ、シュライエルマッハー研究史において決して稀なものではなかった。我々はその十九世紀における典型的な例をここに見ることが出来るのである。

ここで我々はシュライエルマッハーの伝記を通して、その思想を包括的に叙述することを意図したW・デイルタイの仕事に簡単にではあるが触れておかねばならない。彼の大著 Das Leben Schleiermachers（一八七〇年初版）は、その後ながく不可欠の伝記として重要な位置をしめてきた。[17] しかしながら彼自身によって出版された第一巻は、シュライエルマッハーの一八〇二年までの初期しか扱っておらず、しかも時代の哲学思想との関連を主眼にしたものにとどまっている。その他にデイルタイ自身がまとめつつあった叙述は未完成のまま残されてしまったのである。一九六六年にデイルタイの遺稿を整理して出版された Das Leben Schleiermacher 第二巻には、彼がシュライエルマッハーの神学および哲学に関して体系的な叙述を意図していたことが明瞭に示されている。[18] それが完成された姿で我々の前に提示されなかったことは誠に惜しまれる。

ベンダーやデイルタイの業績を想起しつつ、我々はシュライエルマッハーにおける神学と哲学の関連を総合的に探究し叙述する課題の困難さを痛感させられる。事実、その後の研究は個々の特殊研究において優れた仕事がつみ重ねられてきたものの、その体系的な全体の叙述は極めて乏しくなって行くのである。しかし我々はここで優れた特殊研究の例として、ハインリッヒ・ショルツ H. Scholz の著作 Christentum und Wissenschaft in Schleiermachers Glaubenslehre. Ein Beitrag zum Verständnis der Schleiermacherschen Theologie（一九〇九年）を指摘しておかねばならない。これは信仰論の研究に精力を集中した労作であり、「シュライエルマッハー自身をして語らしめる註解書[19]」たらんことに徹した著作である。その精密かつ手堅い手法は今日もなお価値を失っていないものであり、我々の主題に関連して記憶されるべき業績であろう。

さて弁証法神学がシュライエルマッハー研究のうえに影響を及ぼしたことは今さら言うまでもない。恐らくそれは二十世紀前半における研究史を回顧するにあたって特筆すべき事柄であろうと思われる。筆者はまえにこの問題を「弁証法神学におけるシュライエルマッハー解釈」[20]と題して発表しているので、ここでは重複をさけその内容をくりかえさない。ただ我々の主題に関連して特にカール・バルトの強調するところに言及しておかねばならぬであろう。さきに序論においてふれた彼のシュライエルマッハー選集への「あとがき」にも表われていたように、バルトの立場は一言であえて要約するならば、神学が人間学化され、ついに哲学へ従属して行く破局の原因をつくった事のゆえに、彼はシュライエルマッハーを批判する外はないのである。こうした視点は研究史の全体を考慮する時に、すでにふれられたベンダーの主張にやや似ておりながら、しかもより徹底した形で行おうとしていることが理解できるのである。[21]

我々はここで上述のような弁証法神学からの刺戟が深まりゆく中にあって、独自にシュライエルマッハーにおける神学と哲学の関連に関し探究を続けた例として、ゲオルグ・ヴォッベルミン G. Wobbermin をあげたいと思う。彼は一九三三年に Methodenfragen der heutigen Schleiermacher-Forschung[22] と題する論文を公にした。そこには多年にわたる研究を背景にした彼の主張が見られる。すなわち従来の研究の多くが哲学的思索と神学的思考の関連づけを追求するのに急であって、信仰論に見られるようなシュライエルマッハー自身の神学的思想に注目することがなかったと批判する。[23] かくしてヴォッベルミンは「神学者とくに組織神学者が哲学の仕事に参与し、双方の領域で学問の要求を真剣に受け取る時に、両者の関連は常に新しく形成されるのであり、またそうあらねばならぬ」[24]との結論に到達するのである。ここにはすでに述べたシュトラウスやベンダーとも異なる、「神学と哲学」とを相互に独立せる領域として理解し両者の関連づけに答えんとする立場が明瞭に示されるのは誠に興味ぶかいものがある。

第二次大戦後のシュライエルマッハー研究を概観するにあたって、茲ではその全体を取り扱うよりも我々の主題に関係する重要な業績の幾つかにふれ、あわせてその問題点を指摘するにとどめたい。[25] その結論を先取りするならば、第二次大戦後の研究は我々の主題に関する限り、特殊研究においては注目すべきものが公刊されている。ただ今日なお幾多の未解決の問題もあり、シュライエルマッハーにおける「神学と哲学」に関して決定的な最後的解答が出るところには到達していないことを指摘せねばならない。

戦後まもなく一九四七年にフェリックス・フリュッキガー F. Flückiger は Philosophie und Theologie bei Schleiermacher を刊行している。これはバルトの強い影響のもとで書かれた著作であるけれども、必ずしも説得的な内容であるとは言えないように思う。

むしろ戦後にあらわれた諸研究のうちに見出される強い傾向は、シュライエルマッハーの神学的な思想内容をあらためて検討しようとする動きである。これに関連してパウル・ザイフェルト P. Seifert が一九六〇年に発表した Die Theologie des jungen Schleiermachers およびフリードリッヒ・ヘルテルが一九六五年に刊行した Das theologische Denken Schleiermachers は注目すべき著作である。[26] これら二つはともに宗教論の研究に焦点がしぼられており、前者は宗教論を哲学的手段を用いたキリスト教理解の弁明の書であるが、ただ公衆を考慮したため本来の関心事が明らかにならない結果となったとみなす。後者は当時おびやかされていた人間の救いの必然性を宗教の理解に託して表現したのが宗教論であるとの視点から研究を展開している。それらの詳細はここでは割愛せざるを得ないが、我々の主題に関して戦後の研究において忘れてはならぬものである。

続いてマルティン・レデカー M. Redeker はシュライエルマッハーの信仰論第二版を編集する仕事をなしとげ、ま

た自ら一九六八年に Friedrich Schleiermacher. Leben und Werk を発表した。[27] そこにも信仰・希望・愛の宣教者としてシュライエルマッハーを思想史的背景のもとで把握しなおそうとする姿勢が見られ、我々の主題についても参考になり得ると思われる。

さらにハンス・ヨアキム・ビルクナー H.-J. Birkner は一九七四年に Theologie und Philosophie. Einführung in Probleme der Schleiermacher-Interpretation[28] と題する小冊子を公表した。これは研究の現状を把握するには重宝であるが、しかし我々の主題を正面から取り上げながら、実際には、シュライエルマッハーの神学著作のみを検討して終ったことは惜しまれる。

いま百五十年近くに及ぶシュライエルマッハー研究史の回顧を終えるにあたって、我々はそこに見出される二つの問題点に到達するのである。第一にシュライエルマッハーにおける「神学と哲学」との関連を探究した諸研究の結果は、折衷調和、従属あるいは相互独立など、それぞれ更に種々のニュアンスをも含めて、こんにちなお決着をつけがたき程に複雑な様相を呈している。この様な学問的状況のなかで我々のとり得る道は、シュライエルマッハーの原文（テキスト）それ自身から解答を見出すべく常に新たに探究を志す以外にはないであろう。第二に我々の主題に関して特に最近の業績にはシュライエルマッハーの神学および哲学関係の著作を、広範囲にかつ包括的に検討したものが見出せないことである。この点に筆者は率直に言って不満があり、そこに限界が示されていると思う者である。こうした問題意識をもちつつ、我々は先ずシュライエルマッハーの神学的諸著作を検討するところから、われわれの探究の歩みを始めたい。

二　シュライエルマッハーの神学的著作における「神学と哲学」

(イ)　宗教論

シュライエルマッハーの神学的諸著作を検討して、そこにおいて神学と哲学の関連が如何になされているかを把握する仕事に取りくむに際して、我々は方法上いくつかの点を先ず説明せねばならない。第一はここで我々はシュライエルマッハーの宗教論を取り上げることとした点である。彼が宗教論第一版を一七九九年に出版するに至るまでの時期に、われわれの主題に関してシュライエルマッハー自身が関心を持ち続けていたことは最近の研究でも次第に明らかとなっている。[29] しかし、それは別の機会にまとめて考察することとし、我々は先ずシュライエルマッハーの初期著作のうち最も著名であり影響の多かった宗教論に集中することにしたいと思う。第二に宗教論は第一版が一七九九年に出版されたのち、シュライエルマッハーの存命中に第二版が一八〇六年に、第三版が一八二一年に刊行され、訂正や補注が加えられている点が考えられる。いま我々はこの問題をもシュライエルマッハーの思想の歴史的展開を全体的に取り扱う別の機会にゆずることとし、彼の宗教論第一版に視点を集中して我々の探究を始めたいと考える。

シュライエルマッハー研究史において、彼の宗教論が信仰論とならんで注目され多くの議論をよんだ事実は否定すべくもない。[30] そしてその際に宗教論に見出される一種独特の宗教哲学的論述ならびに雰囲気をいかに理解すべきかに関心が集中したことは当然であった。第二次大戦を境として、それ以前の時期は宗教論にシュライエルマッハーの哲学ないしは宗教哲学的アクセントを強く見る立場が多く主張されたのに対して、[31] 最近はむしろ宗教論のなかに神学的ニュアンスが見出されることに注目する業績があらわされてきている。[32]

しかし我々はシュライエルマッハーの宗教論第一版に直接あたるときに、宗教論はそもそも神学なのか哲学なのかという問いが如何に強く研究史において討論されてきたとしても、問題は決してその様に簡単な形で取り上げられてはならないことを見るのである。それは次のまことに平凡な事実によっても裏書きされている。すなわち宗教論において、「神学」の語は全篇を通じてその第一講に一回しか登場してこない。これに対して「哲学」の語は合計二一回に達している。[33] もちろん、このことから直ちに宗教論は哲学であるか神学であるかの結論に到達できると考えるのは早計である。「神学」の語が一回だけ登場してくる個所は、「……かかる神学の体系、世界の起源と終末に関するこれらの理論、不可知なる存在の本質に関するこれらの分析に直面して……」[34] となっている。明らかにこの文章でシュライエルマッハーが十八世紀の啓蒙主義神学を名ざしで批判しているのであり、それはまた前後の文脈からも一目瞭然である。すなわち、人間の「崇高で光輝ある側面がその本性から遠ざかり、その自由を喪失し」て、「野性的で冷酷な時代のスコラ的形而上学的精神に束縛され、遂に軽蔑すべき奴隷的状態におかれる」[35] という悲痛な事態を招いたことへの強い反撥が見出されるのである。そこには形而上学的に結びつけられ関連づけられた神学と哲学への批判がつよく打ち出されている。我々はむしろこの点に注目したいと考えるものである。そして、ここから、「これらの体系のなかに宗教を見出さなかったし、……宗教はそこには存在しない……」[36] とシュライエルマッハーが主張せざるを得なくなる局面となることを見たいと思う。かくして宗教の本質を解明することは、今や彼にとって新しき意味における「神学と哲学」の関連を端的に示すものとなってくる。ここからシュライエルマッハーが宗教の本質について、「思惟でも行為でもなく、直観と感情である。宗教は宇宙を直観せんとし、宇宙自身の表現と行為との中に在って、敬虔の念を以て宇宙に耳を傾けようとする」[37] という著名な発言をとることになるのである。

しかしながら宗教論におけるシュライエルマッハーの「神学と哲学」の関連づけは、すでに述べたような制約のもとになされた叙述であることを考慮するならば、茲ではっきりした答えが見出されるのを望むのは、むしろ無理強いをきらいがあることが了解されるであろう。その点が必ずしもシュライエルマッハーの研究史においても常に留意されてきたとは言いがたいのである。筆者としてはシュライエルマッハーの神学、哲学、西洋古典学など各種の学問領域における著作を総合的に検討したのち、「神学と哲学」に関して初めて妥当な結論が得られると考えている。それらの結果は今後あらためて継続して発表して行きたいと思う。

註

1　Art. „Theologie und Philosophie II. Historisch" RGG³ Bd. VI, Sp. 813 f 参照。ちなみにヘーベリンクがこの文章を発表したのは一九六二年のことであった。

2　「シュライエルマッハーとわたし」(一九六八年)(Schleiermacher-Auswahl. Mit einem Nachwort von Karl Barth, hrg. von H. Bolli, München-Hamburg, 1968. S. 290-312. J・ファンクマイアー・加藤・蘇訳、神学者カール・バルト、日本基督教団出版局、一九七一年に収録)、一二〇頁より引用。

3　前掲書、一二六―一二七頁より引用。

4　H. von Campenhausen, Theologenspieß und-spaß. Kaum 400 christliche und unchristliche Scherze, Hamburg, 1973, S. 127 参照。ちなみにヘーゲルに関しては、シュトラウスは次の如き三行連詩を献呈している。

「彼(ヘーゲル)の体系は、彼よりも賢明なのである。
したがって、弟子たちは彼が自身を理解したよりも良く、
先生のことを説明する。」
(前掲書、S. 127)

5　とりわけ次の諸論文が重要であると思われる。
「神人呼応」哲学研究第三三三号、一九四三年。
「福音の論理」哲学研究第三六四号および第三六五号、一九四七年。
「福音の論理(続篇)」神学研究第三号・第四号・第五号、一九五四―五七年。
「Analogia imaginis」神学研究第一七号、一九六九年。
「信仰の論理―アナロギヤ」教義学講座2　教義学の諸問題、日本基督教団出版局、一九七二年。

6　Tabulae librorum e bibliotheca defuncti Schleiermacher

……

derelictorum, qui a. d. XII, Calend. April. a. MDCCCXXXVI et diebus sequentibus……vendendi prostant. VIII, 112 S., Berlin, 1835 参照。

7 今日なお、これら遺稿類は公表されるところに至っていない。しかし筆者が間接に知り得た限りでは、それらは概略して以下のような規模・内容のものである。すなわち、一五箇の函に分類された各種の原稿ならびに校正刷、シュライエルマッハー宛の書簡八箱、シュライエルマッハーの書簡二箱、その他の原稿・書類および書簡あわせて一一箱、五六のファイルに分類したシュライエルマッハーの講義、その他若干の材料などからなっている。

8 本論文においては特に言及はされないが、研究史の視体から記憶されるべき業績として以下のものがある。すなわち比較的ふるい時期のものとして

F. Fischer, Die Schleiermachersche Trennung der Theologie von der Philosophie, verglichen mit der spinozischen, ThStKr 21 (1848), S. 632-674.

W. Bender, Schleiermachers theologische Gotteslehre in ihrem Verhältnis zur philosophischen, und nach ihrem wissenschaftlichen Werth, Jahrbücher für deutsche Theologie 17 (1872). S. 656-737.

G. Runze, Der Einfluss der Philosophie Schleiermachers auf seine Glaubenslehre, erhärtet an seiner Lehre von der göttlichen Gerechtigkeit, Diss. Berlin, 1876.

H. Mulert, Schleiermacher-Studien I, Schleiermachers Ansichten in ihrer Bedeutung für seine Theologie, Giessen, 1907.

G. Wehrung, Die Dialektik Schleiermachers, Tübingen, 1920.

A. von Ungern-Sternberg, Die Begegnung von Theologie und Philosophie bei Schleiermacher in seiner Reifezeit, ZThK NF 14 (1933), S. 289-304.

H. Rust, Schleiermacher über Christentum und Philosophie, Königsberg, 1934.

R. Brandt. The Philosophy of Schleiermacher, New York, 1941.

H.-G. Fritzsche; Theologie als Wissenschaft. Über den systemtheoretischen Unterschied zwischen Theologie und Religionswissenschaft unter besonderer Berücksichtigung der enzyklopädischen Konzeption Schleiermachers, Diss, Berlin, 1953.

また最近のものとして以下のものがある。

H. Falcke, Die philosophische und theologische Grundlagen der Gesellschaftslehre Schleiermachers, Habilitation Rostock, 1961.

E. Schott, Erwägungen zu Schleiermachers Programm einer philosophischen Theologie, ThLZ 88 (1963), Sp. 321-336.

F. Kaulbach, Schleiermachers Idee der Dialektik, NZSTh 10 (1968), S. 225-260,

H. J. Rothert, Die Dialektik Friedrich Schleiermachers. Überlegungen zu einem immer noch wartenden Buch, ZThK 67 (1970), S. 183-214.

G. Ebeling, Frömmigkent und Bildung, in: Fides et communicatio. Festschrift für M. Doerne zum 70. Geburtstag, Göttingen 1970, S. 69-100; in: Wort und Glaube Bd. III, Tübingen, 1975, S. 60-95.

M. Cordes, Der Brief Schleiermachers an Jacobi. Ein Beitrag zu seiner Entstehung und Überlieferung, ZThK 68 (1971). S. 195-212.

E. Herms, Herkunft, Entfaltung und erste Gestalt des Systems der Wissenschaften bei Schleiermacher, Gütersloh, 1974.

F. Wagner, Schleiermachers Dialektik. Eine kritische Interpretation, Gütersloh, 1974.

9 Hallische Jahrbücher für deutsche Wissenschaft und Kunst 2 (1839), S. 97-102, 105-136, 305-307, 313-382, 545-550, 553-592 参照。また本文の引用は前掲書 S. 588 による。

10 前掲書 S. 588 参照。

11 前掲書 S. 563-565 参照。この点はシュライエルマッハーのキリスト論を攻撃する際に強調しているところに通ずるものがある。これに関しては拙稿「シュライエルマッハー研究史の視点より見たる近代プロテスタント神学の一断面」(神学研究第一一号に収録)、とくに「二の(イ)」シュトラウスの項目を参照されたい。また併せてその注11を参照されたい。

12 Zweiter Band, 1841. (Nachdruck: Darmstadt, 1973) S. 176 より引用。

13 前掲書 S. 176f. より引用。

14 W. Bender, Schleiermachers Theologie mit ihren philosophischen Grundlagen dargestellt.

1 Teil: Die philosophische Grundlagen der Theologie Schleiermachers,

2. Teil: Die positive Theologie Schleiermachers, Nördlingen, 1876-78.

15 前掲書 1. Teil, S. IV 参照。

16 前掲書 2. Teil, S. 351-545 参照。また S. III を比較されたい。

17 なお本書は一九二二年にくルマン・ムンルト H. Mulert により、一八〇三年より七年に及ぶ期間までの伝記を増補した第二版がある。また更にそれらを合せてマルチン・レデカー M. Redeker により編集された第三版が一九七〇年に出版されている。W. Dilthey, Das Leben Schleiermachers, Bd. I, Erster Halbband 1786–1801; Zweiter Halbband 1803–1807, Berlin, 1970³.

18 W. Dilthey, Das Leben Schleiermachers, Bd. II, Schleiermachers System als Philosophie und Theologie: 1. Halbband, Schleieamachers System als Philosophie: 2. Halbband, Schleiermachers System als Theologie, hrg. von M. Redeker, Berlin, 1966.

19 H. Scholz, Christentum und Wissenschaft in Schleiermachers Glaubenslehre. Ein Beitrag zum Verständnis der Schleiermacherschen Theologie, Leipzig, 1911², S. III 参照。

20 神学研究第二二号に収録されている故、参照していただきたい。

21 なおベルトに関しては前掲拙稿の「一の(4)」、ベルトの項目ならびに注を参照されたい。とくにシュライエルマッハーに関する総括的叙述として Die protestantische Theologie im 19. Jahrhundert. Ihre Vorgeschichte und ihre Geschichte, Zürich, (1947) 1952², S. 379–424 にある Schleiermacher の項目が重要である。なお、この関連で忘れてはならないシュライエルマッハーの総括的叙述として次のものがある。E. Hirsch, Die Anfänge Schleiermachers, in: Geschichte der nenern evangelischen Theologie. Bd. IV, Gütersloh, 1960², S. 490–582 ならびに Schleiermachers Philosophie und Theologie in ihrer Reifezeit, in; a. a. O. Bd. V, Gütersloh, 1960², S. 281–364.

22 Nachrichten von der Gesellschaften der Wissenschaften zu Göttingen (1933), philologisch-historischer Klasse, S. 30–52 に収録。

23 前掲書 S. 35 参照。

24 前掲書 S. 42 より引用。

25 シュライエルマッハーの研究文献に関しては、拙著「解釈学の諸問題」、日本基督教団出版局、一九七四年、六三—六五頁、七〇—七一頁ならびに拙稿「最近のシュライエルマッハー研究書について」(書評)、神学研究第二三号(一九七五年二月)を参照されたい。

26 P. Seifert, Die Theologie des jungen Schleiermachers, Gütersloh, 1960; F. Hertel, Das theologische Denken Schleiermachers untersucht an der ersten Auflage seiner Reden《Über die Religion》, Zürich, 1965 参照。

27 F. Schleiermacher, Der christliche Glaube nach den Grundsätzen der evangelischen Kirche im Zusammenhang dargestellt, hrg. von M. Redeker 2 Bde., Berlin, 1960 および M. Redeker, Friedrich Schleiermacher. Leben und Werk (1768–1834), Berlin, 1968 を参照されたい。

28 H.-J. Birkner, Theologie und Philosophie. Einführung in Probleme der Schleiermacher-Interpretation, München, 1974 参照。

29 これに関しては特に E. Herms, Herkunft, Entfaltung und erste Gestalt des Systems der Wissenschaften bei Schleiermacher, Gütersloh, 1974 がすぐれた神学史的叙述を展開している。なお他に F. Weber, Schleiermachers Wissenschaftsbegriff. Eine Studie aufgrund seiner frühesten Abhandlungen, Gütersloh, 1973 および E. H. U. Quapp, Christus im Leben Schleiermachers. Vom Herrnhuter zum Spinozismus, Göttingen, 1972 を比較されたい。

30 たとえば古いものであるが、A. Ritschl, Schleiermachers Reden über die Religion und ihre Nachwirkungen auf die evangelischen Kirche Deutschlands, Bonn, 1874 は極めて良くその事情を説明する文献である。

31 多くの研究文献のうち典型的なものとして O. Piper, Das religiöse Entwicklung. Eine kritische Analyse der Schleiermacherchen Reden über die Religion, Göttirgen, 1920 をあげる。また Emil Fuchs, Schleiermachers Religionsbegriff und religiöse Stellung zur Zeit der ersten Ausgabe der Reden (1799–1806), Gießen, 1901 および E. Huber, Die Entwicklung des Religionsbegriff bei Schleiermacher, 1901 (Nachdruck, Aalen, 1972) を比較されたい。

32 とくに注26に指摘した P. Seifer ならびに F. Hertel の著作を参照されたい。

33 F. Hertel 前掲書の末尾にある索引 (S. 290, 291, 297, 298) による。なお「哲学」に関連する語として、以下の如く表示されている(一九七頁)。

	第一講	第二講	第三講	第四講	第五講	合計
哲学	四	一〇	四	一	二	二一
哲学的	〇	二	一	〇	一	四
哲学者	二	〇	〇	〇	一	三

34 シュライエルマッハー、佐野・石井訳、宗教論(岩波文庫)、二九頁より引用、なお、この文章は第一版原文には二六頁に見出される (F. Schleiermacher, Über die Religion. Reden an die Gebildeten unter ihren Verächtern, hrg. von R Otto, Göttingen, 1967⁶, S. 33 参照。

35 前掲書、二九頁より引用。また第一版原文、二六頁を参照されたい。

36 前掲書、三〇頁より引用。第一版原文、二六頁参照。

37　前掲書、四九頁より引用。第一版原文、五〇頁参照。

参考文献

参考文献として全体にわたるものをあげることは別の機会にゆずることとし、ここでは、さしあたり研究史および宗教論に関連する特に重要な文献のみに限定した。なお、この機会に本論文に使用した略符号は Internationales Abkürzungsverzeichnis für Theologie und Grenzgebiete, hrg. von S. Schwertner, Berlin, 1974 によっていることを附記しておきたい。

研究史関係

J. Wendland, Neuere Literatur über Schleiermacher, ThR 17 (1914), S. 133–143.

H. Mulert, Die neuere Schleiermacher-Literatur, ZThK NF 2 (1921), S. 295–310.

H. Mulert, Neuere deutsche Schleiermacher-Literatur, ZThK NF 14 (1933), S. 370–378; NF 15 (1934), S. 77–88, 256–273.

H.-J. Birkner, Schleinrmacher-Literatur, VF 1958/59, 1fg. 2/3, S. 150–157.

F. W. Kantzenbach, Schleiermacher und Protestantismus, ZRGG 10 (1958). S. 247–250.

T. N. Tice, Schleiermacher Bibliography, With Brief Introductions, Annotations, and Index, Princeton, 1966 (vgl. ZKG 79 (1968), S. 424–427 に H. Peiter による訂正補充がある。)

宗教論関係

A. Ritschl, Schleiermachers Reden über die Religion und ihre Nachwirkungen auf die evangelischen Kirche Deutschlands, Bonn, 1874.

Emil Fuchs, Schleiermachers Religionsbegriff und religiöse Stellung zur Zeit der ersten Ausgabe der Reden (1799–1806), Gießen, 1901.

E. Huber. Die Entwicklung des Religionsbegriffs bei Schleiermacher, 1901 (Nachdruck: Aalen, 1973).

O. Piper. Das religiöse Erlebnis. Eine Kritische Analyse der Schleiermacherschen Reden über die Religion, Göttingen, 1920.

P. Seifert, Die Theologie des jungen Schleiermacher, Gütersloh, 1960.

F. Hertel, Das theologische Denken Schleiermachers untersucht an der ersten Auflage seiner Reden《Über die Religion》, Zürich, 1965.

第二イザヤの創造論 (I)(1)

向井孝史

一般に第二イザヤと呼ばれている無名の預言者の使信は、四〇・一の導入部からも明らかなように、旧約のすべての使信の中でも最も慰めに満ちたものの一つであろう。そこでは捕囚の第二世代の人々に対して、神ヤハウェの世界支配と、そして捕囚からの解放が高らかに告げられる。この神の世界支配と捕囚からの解放の宣言の根底には、神ヤハウェの新しい創造の業というモティーフがある。ちなみに、旧約書の中で第二イザヤ程「創造」に言及している者はない。そこで何故に第二イザヤが繰り返し「創造」について述べねばならなかったのか、又、第二イザヤにとって、「創造」とは一体何であったのかを明らかにしようとするのが本論の試みである。